

「表現指導法」授業における現状と課題 －保育学生の学びから－

The Present Conditions and Problem in the Class of Expression Instruction Method

福 西 朋 子
Tomoko Fukunishi
柳 瀬 慶 子
Keiko Yanase
林 韓 燮
Hanseop Yim
藤 重 育 子
Ikuko Fujishige

(要 約)

子どもの表現活動の援助や指導を行うために保育者に何が求められ、養成校では何を教授するのか。本研究では、これらの問い合わせに対する課題を「表現指導法」授業を切り口に見出すことを目的とした。身体・言葉・音楽・造形各授業の現状を「保育学生の学び」から論じ、共通の課題として、創造力・表現力や表現遊びの過程を重視する視点の不足等を挙げた。これらを踏まえ、今後の授業の在り方として、各基礎技能科目との連携を図ること、実習の学びと連動したこと等から、学生の表現観・保育観構築、保育デザイン力を養うことにつなげること、と導いた。

(キーワード)

表現、指導法、身体・言葉・音楽・造形

1. はじめに

“感じたことや考えたことを自分なりに表現する”、これは、領域「表現」に示された子どもの表現する姿である。このような姿から保育者は、子どもが、“豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすること”を願い、子どもの表現活動の援助や指導を行う。では、保育者に求められることは何であり、保育者養成段階における表現領域に関わる授業では何を教授するのか。これらは、平成元年に『幼稚園教育要領』及び『保育所保育指針』に新たな内容として領域「表現」が提示されてから現在までに、度々課題意識として挙がり、様々に論じられてきたことは言うまでもない。しかしながら、領域「表現」に掲げられたねらいや内容と保育の場での表現活動の実際において、また、その保育の場と連動した養成校での「表現」に係る教授内容については、未だ試行錯誤であることは否めない。領域「表現」の提示から約30年を経た今、子育て支援新制度が平成27年度から施行された。この制度は、保育の「量」確保に重点が置かれてはいるが、やはり、保育の「質」が重要であるとの再認識と「質」向上のための改善策がより求められているともいえる。

本研究は、その保育の「質」を養成校における「表現指導法」授業を切り口として問い合わせ、研究課題を

見出すことを目的とする。本論では、まず「表現指導法」授業の現状と課題について明らかにする。T短期大学保育者養成課程の「保育の内容・方法に関する科目」に位置づく身体・言葉・音楽・造形各々の科目¹について「保育学生の学び」を通して論ずる。そして、各科目の課題の共通項を見出し考察、今後の表現領域授業のあり方に関する課題を保育現場との連携も展望しながら、導くこととする。

2.各科目の実践と課題

2-1. 身体表現指導法

(1) 授業の概要

本研究で取り上げる授業は、平成26年度後期に実施した「身体表現指導法」である。授業テーマは「身体表現における実践的指導力の養成」。学習内容は、授業前半に「身体で表現するということ」をリズム遊びやなりきり遊びの実技を通して学び、後半にグループで身体表現の保育実践を計画し、実践、振り返りを行った。受講者は、T短期大学子ども学科2年生94名（Iクラス51名、IIクラス43名）。

表1 平成26年度「身体表現指導法」授業シラバス

授業回	学習内容	授業回	学習内容
1	オリエンテーション（講義）	9	模擬保育の計画（グループ学習）
2	身体表現の保育活動における現状と課題把握 —運動会ダンスより—（講義）	10	模擬保育案の事前検討① (提案グループによるプレゼンテーションと討議)
3	からだでコミュニケーション（実技）	11	模擬保育実践①（グループによる提案・実技）
4	リズムダンス遊び①—リズムにのるということ—（実技）	12	模擬保育の振り返りと再構成① (グループ討議と保育実践の再構成)
5	リズムダンス遊び②—のりの交流—（実技）	13	模擬保育案の事前検討② (提案グループによるプレゼンテーションと討議)
6	なりきり遊び①—なりきるということ—（実技）	14	模擬保育実践②（グループによる提案・実技）
7	なりきり遊び③—イメージの交流—（実技）	15	模擬保育の振り返りと再構成② (グループ討議と保育実践の再構成)
8	即興遊びから作品創作へ—イメージカルタで遊ぼう—（実技）		

(2) 現状～模擬保育実践後の討議記録より～

模擬保育実践後の討議記録から、学生の実践的指導力に関する課題を考察する。模擬保育案は計24案あり、その内事前プレゼンテーションで選出された8案の模擬保育を行った。その後、模擬保育実践のビデオ記録を振り返りグループ討議を行った。討議記録は、グループ討議で出た意見を各実践グループがまとめた。本研究では討議記録にあがった課題を、【1】「身体表現のおもしろさ（探究テーマ）に触れるための手立てと運動者の姿」【2】「他者と協同的に身体表現遊びを発展させる指導方法」【3】「保育者の指導性の強さ」【4】「その他」の4つの視点で分類し、各課題の前に分類番号を付して明示する。

表2 各グループの模擬保育実践と実践課題

<u>第1実践：遊び名「ゆめの遊園地へいこう！」（リズム・なりきり遊び）</u>
【1】導入部分で、スムーズに身体表現遊びの世界（リズムのり）へ誘うことが出来なかった。 【1】導入部分で、運動者に身体表現遊びの見通しを持たせることが出来なかった。 【2】友だちとのかかわりの広がりが見られなかつた。 【3】動きの指示が多く、保育者の指導性が強い。そのため、運動者の表現が、保育者の動きの真似にとどまってしまった。 【3】子どもが身体表現遊びに夢中になっている時に、保育者が次の指示をしてしまつた。 【1】イメージから離れて、走り回る運動者の様子が見られた。 【1】全体的にうまくリズムにのせることが出来なかつた。 【4】保育者と運動者の立ち位置が遠かつた。 【1】身体表現遊びの世界に入れない運動者がいた。
<u>第2実践：遊び名「めくってめくってシンデレラ」（リズム・なりきり遊び）</u>
【1】シンデレラの世界を動きで表現することが難しかつた。題材設定や場面設定を含めて再考する必要があつた。 【1】止まる動きや他者を意識して動く声掛けが必要であつた。 【1】イメージカルタの内容を再考し、運動者が動きたくなつたり、ねらいに即した動きを提示したりする必要があつた。 【1】イメージから離れて、走り回る運動者の様子が見られた。 【1】導入部分で、イメージカルタを事前に提示して、イメージを膨らませてから活動に入る必要があつた。 【1】動きの質が一定になつてゐた。そのため、場面設定を行い、動きの質を変化させる必要があつた。 【1】移動の時もシンデレラの世界の身体表現遊びとして移動する必要があつた。 【2】子どものイメージが生起したら、それを取り入れて発展させていく必要があつた。 【2】友だちと一緒にする動きを入れる必要があつた。 【2】個々の身体表現を交流する機会を設ける必要があつた。 【1】保育者も身体表現遊びに加わる必要があつた。
<u>第3実践：遊び名「楽器になりきろう」（なりきり遊び）</u>
【1】保育者の動きの提示で、運動者のイメージを多様に広げる必要があつた。 【1】楽器の音を擬音語でも表現しながら行う必要があつた。 【1】楽器の音の身体表現遊びに夢中になり切れない運動者がいた。 【1】なりきる対象（題材）が曖昧であった。「○○の世界」の「○○」の設定を明確にする必要があつた。 【2】保育者と運動者の関係から、楽器と運動者・運動者同士の関係への切り替えが必要であつた。 【4】保育者と運動者の立ち位置が遠かつた。 【4】身体表現遊びの範囲（場）を広げる必要があつた。
<u>第4実践：「ビニールぶくろうくん」（なりきり遊び）</u>
【1】1つの活動が長く、運動者が飽きている様子が見られた。 【1】ビニールの質感を身体表現できる支援が必要であつた。 【1】イメージから離れて、走り回る運動者の様子が見られた。 【1】場面設定があると、よりなりきり遊びに夢中になれた。
<u>第5実践：「マジカルファンタジーツアー」（リズム・なりきり遊び）</u>
【1】なりきりのおもしろさを味わえていなかつた。 【1】おもしろさに触れさせるための支援が出来なかつた。 【1】新聞紙という具体物を使用することで身体表現が広がらなかつた。 【1】新聞紙を使用することでたたき合いが始まつてしまつた。 【1】身体表現遊びの世界に夢中になれず、身体全体を使った表現が引き出せなかつた。 【4】保育者が段取りに追われてしまつた。 【3】隊形を円にすることで自由な身体表現が出にくかつた。
<u>第6実践：「みんなでウォッチッチ」（リズム・なりきり遊び）</u>
【1】保育者が前に立つて正面をつくつてしまつた。（子どもと一緒に遊ぶ必要があつた） 【4】主の保育者以外の者が支援に当たれなかつた。 【3】提示した定型の動きが難しかつた。 【3】定型の動き方の説明が不足していた。 【1】提示した定型の動きに魅力がなく、飽きている様子が見られた。 【3】自由パートを増やし、運動者の身体表現を豊かにする必要があつた。 【2】ペアダンスを入れるなど、他者とのかかわりを設定する必要があつた。 【1】導入部分で、イメージカルタを事前に提示して、イメージを膨らませて活動に入る必要があつた。
<u>第7実践：「エビカニクス」（リズム遊び）</u>
【2】友だちとのかかわりが少なかつた。 【1】身体全体で動けていない運動者に支援が必要であつた。 【1】エビやカニの動きのバリエーションを保育者がたくさん持つておく必要があつた。 【2】運動者の身体表現を交流する必要があつた。 【2】見せ合いの時、身体表現する側と観る側にはっきりと分けずに、リズムのりを共有するような観方の工夫が必要であつた。
<u>第8実践：「だるまさんが○○」（なりきり遊び）</u>
【1】「だるまさん」の絵本は、だるまさんの世界に運動者がスムーズに入るため、活動直前の導入に入れることが必要であつた。 【1】絵本からもっとイメージを広げていく流れが必要であつた。 【2】友だちとのかかわりが生まれる題材設定が必要であつた。 【1】動き続けるのではなく、ストップモーションの場面を入れてもよかつた。 【1】動きが生起していない子どもへの支援の必要があつた（保育者が動いて子どもの視覚からイメージを広げていく等）。 【1】「○○になる」だけでは、イメージが広がらなかつた。言葉掛けの工夫が必要であつた。

(3) 課題～討議記録の考察より～

各模擬保育実践から計 57 件の課題があがり、その内訳は、【1】「身体表現のおもしろさ（探究テーマ）に触れるための手立てと運動者の姿」36 件、【2】「他者と協同的に身体表現遊びを発展させる指導方法」10 件、【3】「保育者の指導性の強さ」6 件、【4】「その他」5 件であった。これらをもとに、身体表現指導法の学生の学びにおける課題を考察する。

①身体表現遊びの世界を創る 設定した題材の世界（例：遊園地など）への誘い方に課題が残った。まずは、運動者と題材との関係を熟考して運動者が思わず遊びたくなる題材設定の必要がある。設定する題材は、どのような身体表現が生起してほしいのかという保育者のねらいと関連させて設定する必要がある。また、保育者が身体表現遊びのリーダーになる等、保育者自身の身体表現力も必要である。

②運動者の表現が生起する自由性を保障する 「保育者が決めた定型の動きに縛り過ぎた」という記述が見られた。保育者が運動者の身体表現を生むきっかけ創りは重要であるが、定型の動きに縛り過ぎず、運動者の身体表現が生起する自由性の保障が必要である。運動者が身体表現遊びの世界に夢中になってきたら、保育者は「見守る」ことが大切である。ただ見守るのではなく、どのような身体表現を期待するのか具体的な運動者の動きを描きつつ、運動者の身体表現が生起する仕掛けを創る必要がある。

③運動者同士のかかわりから身体表現を豊かにする 保育者と運動者の関係（保育者のまねなど）だけではなく、運動者同士が表現を交流して個々の身体表現を一層豊かにする必要がある。かかわりを創るには、どのような身体表現遊びの形態をとるのかなど他者関係を主軸とした保育デザインが必要である。

2-2. 言葉表現指導法

(1) 授業の概要

まず到達目標として「子どもの発達課程を意識した保育や援助方法の理解を深めることができる」「様々な児童文化財にふれ、保育者にとってふさわしい言葉表現技術を身に付けることができる」の 2 点を挙げた。これらは養成学生の間に、保育者として子どもとの言葉のやりとりから連絡帳や記録など事務的な言葉表現にいたるまで多岐にわたる表現手法を学修する必要があるためである。そして、保育現場へ向かうための練習の場であることにとどまらず、媒体としての児童文化財を使用することで表現をより豊かにすることを目的とし、それらによって子どもたちのその後の展開される表現へ繋がる

表 3 社会人基礎力(12 の要素)の平均値

ア ク シ ョ ン ス ル 力	1 主体性	物事に進んで取り込む力	3.58	3.36
	2 働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	3.14	
	3 実行力	目的を設定し確実に行動する力	3.36	
シ ン キ ング ス ル 力	4 課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	3.03	3.02
	5 計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかに準備する力	3.08	
	6 創造力	新しい価値を生み出す力	2.98	
チ ー ム で 働 く ス ル 力	7 発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	2.98	3.51
	8 傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	3.83	
	9 柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	3.77	
コ ン ト ロ ー ル ス ル 力	10 状況判断力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	3.53	4.05
	11 規律性	社会のルールや人との約束を守る力	4.05	
	12 ストレス コントロール力	ストレスの発生源に対応する力	2.89	

であろうと考えられた。これらの到達目標を掲げるにあたり、大日方ら（2015）²は、T大学2年生158名を対象に経済産業省が提唱する「社会人基礎力（12の要素）」における12の能力要素について、「5：非常にある（当てはまる）」、「4：かなりある（当てはまる）」、「3：少しある（当てはまる）」、「2：あまりない（当てはまらない）」、「1：まったくない（当てはまらない）」の5件法にて回答してもらう調査を実施した。結果として、全体の平均値は3.35であり、さらに、3項目（「前に踏み出す力」「考え方」「チームで働く力」）それぞれの値から見る限り平均的な数値を示している（表3）。しかしながら、全体の平均値をかなり下回っている能力要素、且つ3.0以下の平均値を示しているのは「創造力」、「発信力」、「ストレスコントロール力」の3要素であった。またこのうち、前の2つの能力に関してはそれぞれ、近年各企業等の採用において特に重視されている、既存の考えにとらわれない斬新な発想力や想像性及び、コミュニケーション能力に対応するものであろう。また、これらの各能力は企業活動に限らず福祉や教育などの分野においても重要な資質であると考えられることから、保育士養成において重視すべき観点である。

これらの視点から、言葉表現指導法においても、特に養成学生の意識が低いと見られた「創造力」や「発信力」を高めるために、授業内容や進行方法を考え試みた。多くの回において、グループ学習に取り組み、課題に対して意見の交換や発表するための方法を思考したり、最終回の発表に向けてさまざまな方法を創造したりといった2つの能力を伸ばすことができるような課題への取り組み方を示した。

（2）現状

全15回の授業内容として、平成26年度は表4の通り実施した。内容に関しては、保育内容言葉の視点や他領域との関わりにふれたり、指導法について講義形式にて授業進行したりしたことが多かつた。それでは、学生自身が主体的に表現する経験や児童文化財を積極的に用いる場面が乏しかったことから、今年度実施予定である授業内容に関しては表5のように変更を試みた。教科書は昨年度と同一であり、自分で書き込むとオリジナルの参考書代わりとなる『児童文化がひらく豊かな保育実践』

（中坪ら,2009）³を使用した。前半の8回においては教材に児童文化財を用いて、身近な課題に取り組む演習を行った。ここでは「発信力」を養う目的のため、毎回異なるグループでの学習を実施した。後半の4回では、最終回のお話遊びの発表に向けて固定のグループによる製作を通して「創造力」を養う

表4 平成26年度シラバス

授業回	授業内容・時間外学習（予習・復習）
1	オリエンテーション、保育内容「言葉」 ：授業目標や授業計画に関して知る。保育内容「言葉」について振り返る。
2	言葉が育つ環境（他領域との関わり） ：保育内容「言葉」に関して、他領域とのかかわりについて理解を深める。
3	言葉が育つ環境（援助の在り方） ：保育内容「言葉」に関して環境構成や保育者の役割について知識を得る。
4	言語獲得期の発達1 ：コミュニケーション関係の基盤の形成、音声の発達過程、文の構造、発音の発達について学ぶ。
5	言語獲得期の発達2 ：話すことばの構造、発音の発達、読みの発達、話すことばと書きことばについて学ぶ。
6	児童文化財について1 ：領域のねらいや年齢に合わせた絵本の読み聞かせと紙芝居の演じ方を実践を通して学ぶ。
7	児童文化財について2 ：ペーパーサークル・パネルシアター・玩具等の児童文化財に触れる
8	児童文化財について3 ：童謡・手遊びに触れる。場面や環境に合わせたあそびの実践を行う。
9	児童文化財について4 ：伝承遊びやことばあそびに触れる
10	教材を考える ：年齢に応じた遊びについて知識を深める。身近な材料で遊びの展開を考える。
11	教材の作成1 ：グループに分かれ、児童文化財を用いた発表に関して話し合う。実践のための教材作りに取り組む。
12	教材の作成2 ：グループに分かれ、児童文化財を用いた発表に関して話し合う。指導案を作成する。
13	言語活動が主となるお話遊び発表会1 ：各グループごとに模擬保育形式にて発表を行う。実践者・発表者とともに振り返りシートに記入し、今後の実践へつなげる。
14	言語活動が主となるお話遊び発表会2 ：各グループごとに模擬保育形式にて発表を行う。実践者・発表者とともに振り返りシートに記入し、今後の実践へつなげる。
15	まとめ ：学修の習得度についてふりかえり、今後の課題を考える。

ことや、個人で目標を設定できるよう教員との間に大福帳を用いて「発信力」の向上を目的とした。

(3) 課題

まず平成 26 年度授業における課題としては、先に挙げた通り、発信力や創造力の得点に見られるような学生の主体的に表現する姿が見受けられなかった。また教員との意見交換として用いた大福帳に関しては、書面上の発信はできるものの、グループにおける自身からの発信（発言）が難しいということも特徴として挙げられる。そのため、

学生自身が子どもの表現を引き出すレベルまでには至らないとも考えられた。そして自信のなさの表れからか、自己評価の厳しさに比較して他者評価の甘い点が多く見られた。そのあたりを踏まえ平成 27 年度授業に関して現時点では授業開講途中であるが、受講学生においては早い段階から相互評価を行うよう取り入れ(評価が第一の目的ではない)互いにフィードバックできる環境づくりに努めている。グループ学習の醍醐味を伝えること、児童文化財に触れその媒体を用いた遊びの展開まで行う表現力や保育者にとってふさわしい言葉表現技術について教授している。今後、学生間において互いに刺激し合い、より質の高い表現力が生み出してくれることを願っている。

2-3. 音楽表現指導法授業

(1) 授業の概要

「音楽表現指導法」は 2 年次前期開講科目(受講学生数：130 名)である。授業概要を「領域『表現』における子どもの音・音楽表現について理解し、表現それぞれの場面での活動の指導・援助について考える。『きく』『うごく』『うたう』こと等による音楽表現活動の指導・援助法を学び、実践することで、子どもの表現の育ちを支える保育者の役割について研究する。」とし、到達目標は、1. 子どもの音楽表現の理解、2. 保育者としての表現力、3. 表現活動の実践力、4. 指導・援助法の習得、を掲げている。個別の技術習得科目ではないため、グループでの演習を主とし、学生相互の取り組みや意見のやりとりにより課題の検討や模擬保育の実践を行えるよう授業進行している。子どもの表現する姿、活動は多様である。その姿それぞれに応じ、指導・援助を行うことが保育者には求められるため、授業においても他

表 5 平成 27 年度シラバス

授業回	授業内容・時間外学習（予習・復習）
1	オリエンテーション、保育内容「言葉」 ：表現指導法の意義、授業目標や授業計画に関する知識。保育内容「言葉」や他領域とのかかわりについて振り返る。
2	児童文化財の用い方・事例研究【絵本】（P.136～137） ：個人の課題、グループの課題に取り組む。教科書 2 章の振り返りを行う。
3	児童文化財の用い方・事例研究【紙芝居】（P.138～139） ：個人の課題、グループの課題に取り組む。教科書 2 章の振り返りを行う。
4	児童文化財の用い方・事例研究【童謡】（P.144～145） ：個人の課題、グループの課題に取り組む。教科書 2 章の振り返りを行う。
5	児童文化財の用い方・事例研究【手遊び】（P.146～147） ：個人の課題、グループの課題に取り組む。教科書 2 章の振り返りを行う。
6	児童文化財の用い方・事例研究【ペーパーサポート】（P.142～143） ：個人の課題、グループの課題に取り組む。教科書 2 章の振り返りを行う。
7	児童文化財の用い方・事例研究【シアター】（P.140～141） ：個人の課題、グループの課題に取り組む。教科書 2 章の振り返りを行う。
8	児童文化財の用い方・事例研究【ゲーム・コンピュータ・テレビ】（P.152～157） ：個人の課題、グループの課題に取り組む。教科書 2 章の振り返りを行う。
9	児童文化財の用い方・事例研究【伝承遊びと年中行事】（P.150～159） ：個人の課題、グループの課題に取り組む。教科書 2 章の振り返りを行う。
10	教材としての児童文化財について考える ：これまでの児童文化財について振り返る。年齢に応じた遊びについて知識を深める。身近な材料で遊びの展開を考える。
11	発表に向けての製作（1） ：グループに分かれ、児童文化財を用いた発表に関して話し合う。実践のための教材作りに取り組む。個人・グループの課題をまとめる。
12	発表に向けての製作（2） ：グループに分かれ、児童文化財を用いた発表に関して話し合う。実践のための教材作りに取り組む。個人・グループの課題をまとめる。
13	発表に向けての製作（3） ：グループに分かれ、児童文化財を用いた発表に関して話し合う。実践のための教材作りに取り組む。個人・グループの課題をまとめる。
14	発表に向けての製作（4） ：グループに分かれ、児童文化財を用いた発表に関して話し合う。実践のための教材作りに取り組む。個人・グループの課題をまとめる。
15	まとめ、製作物の発表 ：言語活動が主となるお話遊び発表会として各グループごとに模擬保育形式にて発表を行う。 実践者・発表者とともに振り返りシートに記入し、今後の実践へつなげる。 学修の習得度についてふりかえる。

者の考え、表現する姿から自身の考え、表現を導き出すことも目指している。

(2) 現状

授業では、土台となる理論や技術を学生が習得しており、それらと連動し授業を進めることを求める。しかし、音楽の保育表現技術科目との連動、学生自身の「表現する」ことへの課題が浮かび上がる。そこで、それらの現状、及びその課題を踏まえた授業実践状況について次に述べる。

① 保育表現技術（基礎技能）科目との連動について

指導・援助法科目「音楽表現指導法」と保育表現技術（基礎技能）科目は図1の位置づけとなる。また、各科目の連動については、図2に

科目的到達目標を示すことで確認することとす

実習	教育実習I(11月) 保育実習I(2月)	教育実習II(9月) 保育実習I(6月)	
指導・援助法科目		音楽表現指導法	
保育表現技術科目	幼児音楽I	幼児音楽II	子どもと音楽I 子どもと音楽II
開講時期	1年前期	1年後期	2年前期 2年後期

図1 音楽科目と実習科目の開講期

る。養成課程における音楽科目は、2年間に渡り設置され現在でもピアノ技術習得に重点を置くことが多い⁴が、T短大においても例外ではない。もちろん、歌唱、楽器等の内容も行うが、学生の意識としても、この科目受講の目的は「ピアノ」に偏る。しかしながら、平成22年の養成課程改訂の際に「基礎技能」から「保育表現技術」と名称変更され、この表現技術が「保育との関連で習得できるようすること」とのことから、「ピアノ」が弾けることに留まらない表現活動に活かせるピアノの技術の習得、また、「ピアノ」だけでなく、子どもの表現に関する基礎的な知識や技術の習得も求められていることは、筆者の拙稿⁵でも述べた。「うごく」「うたう」活動にピアノ技術は有効であるが、子どもが「感じたことや考えたことを自分なりに表現する」ための指導・援助のための技術の一つに過ぎない。また、学生のピアノ技術習得過程においては、「楽譜を再現する」ことが目的となり、学生自身の表現を「ピアノ」ですることに至る学生は一部である。子どもの表現する過程を鑑みると保育学生自身が、音・音楽で「表現する」経験の充実を重ねることを通して表現力を身につけることが、まず求められる。

② 学生が自身を「表現する」こと

①で挙げた学生自身の「表現する」ことに関する授業実践として、本授業での状況を次に述べる。子どもが「表現する」ことのイメージを持つことを目的とし、学生自身の「表現する」ことの気づきを促すため、まずは、第1段階として、2つの実践をグループで行っている。1つ目は、テーマ『表現する』ということ」とし、自分のことを他者に言葉以外（身体、音）で伝えるワークを行い、その時の状況を教員から提示した項目に沿って振り返るという実践である。振り返る項目は、「自分を他者に伝えるための手段」「自分のことを表現している（伝えられている）と感じるとき」「自分のことを素直に表現できないと感じるとき」「自分が表現活動を行うことと、乳幼児が生活の中で表現することとの共通点や違い」としている。グループ員間でも意見を交換し合うが、その中で、表現とは意図を持って何らかの

音楽表現指導法	
・領域表現における子どもの音楽表現の理解	
・保育者としての表現力	
・子どもの音楽表現活動を創造的に展開する実践力	
・子どもの表現活動の指導・援助法	
幼児音楽	子どもと音楽
・楽典の理解	・保育におけるリズム楽器の奏法と実践方法の習得
・読譜・記譜・聴取の基礎の習得	・子どものリズム活動に活かせるピアノ奏法とアレンジ方法の習得
・ピアノ演奏技術の基礎の習得	・子どもの歌唱活動を支える弾き歌い技術習得とレパートリー拡充
・子どもの歌の歌唱法、弾き歌い技術の基礎の習得	

図2 音楽科目の到達目標

形で表すことだけでなく、表情、動作で無意図にも表れること、それらで自身を伝えようとする行為に対し受け止める他者の存在があつて表現の意欲が高まり、豊かさにつながることへの気づきを導いている。2つ目は、音を「きく」活動である。自分たちの身の回りにはどのような音があるのかを教員の示す課題に沿って探しに行くというものである。探索後は、何の音が、どこでどのように（擬音語）聞こえたのかをグループ員間で出し合い、教員の示したミーティング課題に沿って話し合うが、そこで、日常では気づかない音、季節を感じる音への気づき、目に見えないものの音から何の音かイメージする楽しさ、聞く音は同じでも音の感じ方は人それぞれ違うということに気づいていく。学生のミーティング記録に「人と違うこと、すべてに違いがあり、同じでないことをわかってほしい」「人によって音の感じ方が違う、それを話し合うと楽しい」と表れ、授業の次段階につながる気づきと捉えている。

③ 実習における表現活動事例と授業

子どもの音・音楽で「表現する」ことのイメージを持った指導・援助法の学びのため、表現活動の事例研究も授業の柱と据えている。本授業と実習との位置づけは図1のとおりである。従って、学生の実習経験を踏まえ、テキストの事例を研究すると共に学生自身が観察、経験した事例について研究することも有効であると考える。学生各自に音・音楽による表現活動事例について挙げ、数例をグループミーティングの題

実習園での事例	実習生としての考え方や気づき
A園では、歌詞や音程を覚えさせようと保育者は必死になつていて子どもたちはあまり楽しそうな表情をしていなかつた。嫌がつたり、逃げ出すということはなかつたが、自分から歌おうとする子どもは少なかつた。一方、B園では歌詞や音程なども教えていたが、そこまで気にすることはなかつた。子どもたちは楽しそうに歌つていて、ピアノに近づいて行つた。	子どもが楽しめるようにするために強制的に歌詞を覚えさせようとしてはいけないと思った。保育者は音程などにとらわれすぎではいけない。また、場所などにとらわされることなく自由な場所で歌うことより楽しむことができると思った。しかし、保育者は覚えさせなければいけないという気持ちが強くなつてしまい、子どもが楽しめるかどうかという余裕がないのだと思った。

図3 ミーティングの題材としての事例（学生の実習事例）

材として提示、そして、教員の示すミーティング項目に沿って話し合う。図3は、平成27年度授業実践のある1事例である。おそらく実習や現場で直面するであろう事例のため、学生が身近に考えを巡らせるに有効であり、自身の指導・援助法を築く一助になると考える。

(3) 課題

現状における課題としては、学生自身の「表現する」ことの経験の充実とそれからの気づきを促し、子どもが「表現する」ことのイメージを持った指導・援助法、及び表現技術の教授を行うこと、実習における子どもの姿や表現活動の実際に対する保育学生としての気づきが、指導・援助力を培うために有効であるとの視点に立ち、より具体的な方策を表現技術科目との連動も踏まえ検討することである。

2-4. 造形表現指導法

(1) 授業の概要

本授業は、T短大の2年次の学生133名（本授業の受講者）を対象に、学生自身が表現者であることを認識させ、自己表現方法を見つけ出せるよう、次のように授業を進めた。

1つ目は、表現プロセスを大切にするように指導している。そのため、ポートフォリオの概念を用いた制作活動ノートを導入し、表現活動に関する内容をはじめ、感想などを記録するよう指導した。活動の振り返りを記録する制作活動ノートは、自分の表現プロセスを可視化することが可能であり、表現活

動中、プロセスに重点を置くことができると考えられる。

2つ目は、学生が表現することに対し、一部の表現技法を除き、スキルをベースにした指導は行わない。自己表現をどのように表せるかについて思考し、主体的に表現していくよう授業内容を組み立てた。また、「自己表現」は「自由に表現すること」、「他者の真似ではなく、自分で考えたことを自分で表現すること」として受け止める必要がある。造形活動における基礎スキルは「幼児造形Ⅰ・Ⅱ」の授業で身につけるものであり、本授業では、スキルアップのために、練習してきた「模倣すること」は排除し、個人の経験や想像を活かした表現である「自分のかたち」へ展開できるよう試みた。

3つ目は、紙の形や寸法、使う色など、表現活動の条件や方法について具体化しない。例えば、髪の毛の色は黒ではなく、好きな色を用いること、使用する絵具の種類は自由に選択すること、紙に絵を描く方向は自分で決めるなど、材料や用具、表現方法を決めておかないと材料の種類を豊富にすることによって幅広い自己表現ができると考えられる。その他、学生の作品を常時展示することやグループ活動を多く取り入れることで他者とのコミュニケーション力の向上を図っている。

(2) 現状

前述した授業方針の中、学生は特に「自己表現」について難しく感じ、何をどのように表現すればよいのかについて悩んでいることが多くみられる。むしろ学生が求めるることは、簡単かつわかりやすい活動の方法、そしてすぐに現場で活用できる内容である。幼児造形Ⅰ・Ⅱにおいて、現場で使われている造形活動及び教材制作を中心に、具体的な内容を提示しながら進めているが、これらの科目の方針と本授業の方針と混同していると考えられる。本授業は、幼児造形Ⅰ・Ⅱと異なり、主に「自分が経験・想像（考えたこと・感じたこと・かかわったこと）したことを造形の方法を用いて表現する」という考えを取り入れ、その活動を通して子どもの豊かな造形表現を引き出し、指導できる力を培う科目である。本授業における学生の現状を2年間（平成26～27年度）行ったアンケート調査の結果を基に次のようにまとめた。

1つ目は、「造形」という手段を用いることによって「造形＝美術」の考え方を持ちやすく、下手、好きではないとの反応が多く見られた。また、得意ではないため、他者との表現内容を比較してしまう傾向があった。絵を見て描くことに慣れており、想像したイメージを描くことについて面白さを感じないため、活動が進まない学生が多いことが現状である。抽象的イメージを表現することは他人が見たときにわからないという理由で具体的なイメージを描く傾向が強いため、思い切り自分らしい表現を作り出す学生が少ない。

2つ目は、他者とコミュニケーションを取ることに抵抗があつたりや上手にできないとの意見もあつた。グループ活動は、他者と協調する能力にかかわることであり、表現することにおいても自己主張ができる大切な活動である。しかし、グループ活動の欠点としては、仲間で構成されたグループとそうでないグループとの表現の差が大きく生じることと、仲間のグループの私語は他者の学ぶ権利を侵害することにもつながり、グループ活動の方法についての工夫が必要であると考えられる。

3つ目は、表現活動における条件・方法について具体的に提示しないと、戸惑うことが多くある。表現することは、考えたことや感じたことを自分なりに表すことと定義されるため、より豊かな表現を促

す工夫として、表現活動に使う色彩や形、紙の大きさ・向きなどを学生が自由に選択するようにした。あえて素材の選択・使い方に自由さを与えることが自己表現につながると考えられる。また、成績評価について、完成物によって評価されるという意識が深く根付いていることも表現活動条件を具体的に求めている要因の一つであると考えられる。完成物によって左右されるという成績評価の意識を変えるため、制作活動ノートを導入することで、完成物だけではなく、表現プロセスを振り返ることとなり、その結果より豊かな表現につながると考える。

4つ目は、幼児造形Ⅰ・Ⅱを受講した学生にとって、「造形」という手段を用いることに違いはないと考えがちである。そのため、授業目標や内容を混同する学生が多いことが現状であり、両科目の相違を図4にまとめた。

(3) 課題

最後に、本授業の課題について、次のようにまとめた。

1つ目は、発想力と問題解決力を培うことと、方法や条件によって結果が左右されないプロセス中心の活動が求められる。最終表現物を提示しないことによって無数の異なる結果が生み出されるといわれるティンカリング活動の導入を検討する。ティンカリングの活動とは、実際の物を組み合わせたり分解したりして、実用的なもの、風変わりなものなど、様々目的に合うように作り変える基礎的な技術であり、デザインセンスや問題解決の力を高めることができるとして近年注目されている⁶手法の一つである。このティンカリングの活動をグループ活動と連動させることで、他者とのコミュニケーション力を高めることができると考えられる。

2つ目は、表現活動における材料・用具の選択肢を広げることと、制作活動ノートの様式・記入方法・記録の目的の見直しが必要である。配布テキストに記載されている内容ではなく、表現活動の振り返り、他者からのコメントなど、自己考査ができるよう工夫することが必要であると考えられる。さらに、保育者になった際に、参考資料として活用できるよう工夫する必要がある。

4つ目は、幼児造形Ⅰ・Ⅱと本授業の相違と共通点を明確に提示することと、段階的に基礎技能科目でスキルアップした上で、自己表現を広げる必要がある。そのため、授業内容の一部を変更することと、教授方法を考察することが重要な課題であると考えられる。今後、これらの4つの課題の改善に向けて、授業モデルの作成・検討を行い、授業に適用していくことが必要であると考えられる。

3. おわりに

本研究は、身体・言葉・音楽・造形の各「表現指導法」授業における学生の学びの現状と課題を把握し、今後の表現領域授業のあり方を検討することを目的としてきた。その結果、3つの共通課題が浮かび上がった。1つ目は、保育者としての創造力・表現力の不足である。各「表現指導法」授業の取り組みにおいて、学生の消極的な姿が目立った。表現することを恥ずかしがったり、既成の表現を好んだり

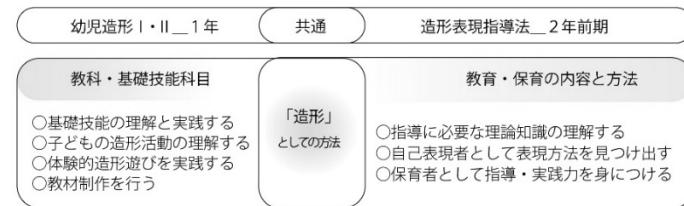


図4 幼児造形Ⅰ・Ⅱと造形表現指導法の相違

まねたりする姿が見られた。そこには、他者からの情報を受信して、自分なりに発信するという創造力・表現力が見られなかった。2つ目は、表現遊びの過程を重視するという視点の不足である。各授業の取り組みにおいて、成果を求め、その評価に拘る学生の姿が捉えられた。しかし、子どもの表現活動においては、成果よりも過程が大切である。その過程を支えるためには、子どもがどのような対象とどうかかわりながら夢中になって遊んでいるのかという子どもの状況や関係性を捉える力、また、取り扱う表現遊びの題材の魅力を明確にして子どもの探究テーマとなる「表現遊びのおもしろさ」を設定する力が求められるが、その不足が窺えた。3つ目は、子どもの表現を引き出す指導方法の修得不足である。子どもが表現遊びに夢中になっている姿を描くことが難しいこともあり、子どもの表現を引き出す指導方法や、子ども同士が表現を交流して協同的に学ぶための指導方法を考案する力の必要性が確認された。

以上の共通課題を踏まえて、今後の表現領域授業の在り方としては、次の3点が考えられる。1つ目は、1年次に修得する身体・言葉・音楽・造形の各基礎技能科目と連携を図ることで、学生が五感を研ぎ澄まして様々な情報を受信する力を養うと共に、他者とのかかわりの中から自己を表現する力を養うこと、2つ目は、実習の学びを振り返ることを通して子どもが表現する姿を具体的に描く力を養い、学生の表現観・保育観構築へとつなげること、3つ目としては、「表現遊びのおもしろさ」を明確に設定する力と、そのおもしろさを表現活動過程で子どもに十分に味わわせ、他者との協同的な学びを育むための保育デザイン力を養う、ということである。

今後の研究課題としては、本研究で明らかになった学生の学びの課題を解決するために授業内容の改善を行いつつ、保育現場との連携を図ることを通して学生の学びの成立と深まりについて考察していくことである。

註

- 1 各々の科目は、T短期大学において、専門科目の「教育・保育の内容と方法」に位置づき、単位数1単位、2年次セメスター科目である。履修条件を4科目中3科目以上選択必修とする卒業必修科目でもある。幼稚園教諭二種免許においては、「教職に関する科目」内の「教育課程及び指導法に関する科目」、保育士資格においては「選択必修科目」の位置づけである。
- 2 大日方重利・藤重育子(2015)「保育専攻学生の社会人基礎力と施設実習後の自己評価の関連」、静岡産業大学論集『環境と経営』第21巻第1号 pp.17-26
- 3 中坪史典(2009)『児童文化がひらく豊かな保育実践』保育出版社
- 4 その理由として、①保育の場で必要としている園が多数ある、②保育者必須の技術との意識が未だに高い、③入学生にピアノ初心者が増加していること、が挙げられる。
- 5 三宅啓子・福西朋子(2012)「保育学生音楽表現技能と幼児の音楽活動の運動性－保育実践力の向上を目指した音楽基礎技能『器楽法』授業実践から－」『高田短期大学紀要』第30号 pp.95-106
- 6 カレン・ウィルキンソン（金井 訳）(2015)『ティンカーリングをはじめよう』オライリー・ジャパン p.6
(The Art of Tinkering,Karen Wilkinson & Mike Petrich,Weldon Owen,2014)

参考文献

- 石井玲子編著(2009)『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』保育出版社
- 村田芳子（2011）『表現運動・表現の最新指導法』小学館
- 村田芳子（2012）『表現運動・リズムダンスの最新指導法』小学館
- おかもとおみわこ・大沢 裕（2010）『造形表現』一藝社
- 岡野昇・谷理恵・伊藤茂子・佐藤学（2011）「体育における『学び』の三位一体」『体育科教育』大修館書店
第 59 卷第 8 号 pp.32-36
- 柳瀬慶子（2014）「表現運動における『文化的な価値』に関する研究-『リズムにのるということ』に着目して-」
『高田短期大学紀要』第 32 号 pp.77-86

付記

本研究は、平成 27 年 9 月 23 日に行われた「第 54 回全国保育士養成協議会研究発表」をもとに、加筆・修正したものである。